

## ■論 評 子どもの思考を阻害するもの

能力開発工学センター 矢 口 新

### (1)

「君は、選挙についてどう思う？」こういう質問を出されたら、とっさに返事できないのが普通であろう。「どう思うって、どういうことだ？」と聞きかえす。そうでなくて、もしベラベラと、何かをしゃべり出す人がいたら、その人は、相手の質問の意向に関係なく、ひとりよがりのことを言う人である。たまたまその答が相手の求めたことに合うこともあるかも知れないが、全くピントの外れたことを答えることになることもあるのである。

この事例をあげたのは、われわれが一緒にもの考えるとき、よくこういう場面にぶつかるからである。授業でもよくこういうことがある。話し合いというのは一緒にものを考えて行くのであるが、上にあげた例の場合に、まず最初の質問の例のような漠然とした問が出されれば、これはもう考えることを中断させてしまうのである。先生がこういう性質の質問を出すことがあっては、もうそれは考えることがわからない人というべきである。

この問のどこがわけがわからない原因となっているかという、2つある。選挙についてというその選挙が、具体的に何を言っているのか、わからないということである。それは昨年末に行なわれた選挙のことなのか、選挙一般のことなのか、あるいは、もっと具体的に選挙のやり方なのか、投票の仕方なのか、何なのかははっきりしないのである。そのことと関連してもうひとつある。「どう思う」という漠

然としたことばである。それは話題になっていることの漠然さと一緒になって、聞く人にとってわけがわからないものになっているのである。

このことは考えるという人間の行動の基本的なあり方に関係があるのである。考えるということ、われわれは、人間の頭の中のことだと非常に抽象的にとらえているが、実はそうではなく、何かある事実について考えているのである。つまり考える材料がはっきりしているとき考えるという行動がおこるのである。その材料というのは、目で見たり、手でさわったりすることができる形で目の前にあるときが一番はっきりしていて、そういうときは、考えるという行動はいきいきとするのである。考えるというのは頭の中のことだというのは誤りなのである。

という疑問をもつ人がいるであろう。それでは自分の過去に経験したこと、知っていることは頭の中のことではないか。そういう材料を使って考えるということをするのではないか。それはその通りであるが、その頭の中にあることというのも、実は目で見たり、手でさわったりしたことであって、それが過去にあったというだけで、実際に考えるときには、目の前にあるのと同じようにそこへあらわれて来ているのである。記憶が再生して来ているのであって、そうでなければ考える材料とはならないのである。つまりはっきりとしたものでなければ考える材料はならない。昔経験したことでも、あれはどんなものだったかなあと思うようなものでは、考える材料にはならないのである。基本的には目の前にあ

るというようなあり方で、そこに材料がなくては考える行動はおこらない。頭の中だろうが、外だろうが、それはどうでもよいのである。

材料があるというだけでは、まだ思考活動はおこらないといった方が実は本当なのである。たとえば次のような質問を思いおこしてみるとよい。目の前に鉛筆が置いてある。「この鉛筆どう思う？」と聞かれたとしたら、やっぱりキョトンとせざるを得ないであろう。ところが「この鉛筆の書きよさはどう？」とか、「硬さはどう？」とか聞かれたら、聞かれた方は早速思考活動をはじめるのである。自分がこれまで使った鉛筆を思いおこす。書いたときのことを考える。そして比較をする。そうしてあれは書きよかったが、これはよくないとか、これはよいがあれはよくないとかと判断をする。そしてよいとかわるいとかと答を出す。これはつまり、どう思うかというその「どう」の中身、意味していることがはっきりしているということである。

このことは思考のあり方として言うと、思考する人間の側の問題であるといってもよい。つまり目の前の「もの」に対して、そのものを見る「み方」がはっきりしているということである。実はこれはなかなかむずかしいことがらであるが、鉛筆はいま目の前におかれた「見るもの」なのであるが、色がよいかわるいかとか、硬さはどうかとか、書きよさの点はどうかとかは、「見ること」なのである。この「見ること」があって、考える行動はおこるのである。いま見るということばを考えるとということばに言い直してもよいのである。

これまで述べたことを、「何に対してどういうことを考えるのか」ということを具体的にはっきりさせれば考える活動はいつもいきいきとしているというように言ったらよいであろう。考えることにゆきづまりが来たときはいつもその点を反省してみることである。それをしないで「さあよく考えなさい」などといくらいってもだめなのである。

## (2)

現代教育はリアルなものをつかまえ方という点できわめて甘い所がある。現代は科学の時代であり、科学とは現象を刻明に追いかけて行くこと、その中から「見ること」を引き出して来るという地道な活動によって成り立つのだが、教育はその点を忘れていている。考えるというのは、頭の中のことで、思っていることをいろいろとひねくりまわすことだぐらいにしか考えていないのではないか。思っているというのは、ことばをもっているということだが、ことばでものを考えることにちがいがいなくても、実はそのことばの中身がたいせつなのである。ことばは便利な道具でもあるが危険な道具でもある。考えるときはそれを使っているが、それを通して、そのことばが示す実体を考えているのである。この鉛筆とあれとではこの方がよいなどと頭の中で考えていても、実はその実体を比較しているのである。ことばの背後にあるもの、実体が考える行動、思考の根源なのである。考えがゆきづまるのは、いつもそれを忘れているからである。実体は人間に無限のものを提供してくれる。ことばはその点では、その人がもっている狭い概念で限界があるのである。広く何でも指すように思うけれども、実は限界があるのである。

たとえば、選挙ということばを思いおこしてみるとよい。それについてあなたが思いうかべる実体は何であろうか。いくつかのことが思い浮かべられるであろう。たとえば選挙の街頭演説だったり、ピラだったり、投票所だったり、選挙区だったりである。ところが他の人が何を思い浮かべるかをしらべると、まだまだいろいろなことが出て来る。それはみな自分の経験した実体を思い浮かべている。それをたくさんの人に聞いてみると、ずいぶんいろいろな事実が出て来る。そういうのをならべて、自分が選挙について思い浮かべるのをくらべてみると、自分の選挙ということばについて思っていることは、やはり

狭いものだということがはっきりするであろう。だからことばだけでもものを考えるということは、思考の発展を阻害するものなのである。自分の頭の中でどうどうめぐりをするということになるだけである。だからゆきづまったら、根源にかえって、実体は何だとまず材料へもどる。それからその事実について、見ていることは何かと考える直すのである。そういう態度があれば思考のゆきづまりは自分で打開できるのである。

実は誰にも思考のゆきづまりはあるのである。恐らく人間の弱点ではないか。考えるということばを道具にして考えるから、誰でも、そのことばにとらわれがちになるのである。何回も使っているうちに、習慣になってしまって、根源の実体とそのことばとが全くおなじだと思いがちである。そして根源の実体にかえることを忘れる。それで、思考の仕方がマンネリズムにおちいるのである。それを打破するには、いつも事実から出なおすという基本的な態度に立ちもどる以外にないのである。新しい考え方を出す人というのは、そういう基本的態度、リアリズムの精神を強くもっている人である。創造的思考というのはそういう態度のことを言うのであって、その結果独創的な考え方も生まれるのである。結果として生まれたものが創造であり、独創的なものであって、思考の仕方にそういうものがあるのではない。

### (3)

思考力を育てるなどということばがあるが、そういう能力があると考えるより、むしろ態度を育てると考えた方がよい。態度というのは、習慣といってもよいであろう。思考する習慣というのは、いつも考える材料を具体的に目の前におき、あるいはそれと同じように頭の中に思い起こし、それについてどういうことを考えるのか、つまり見ることをはっきりさせる、そういう習慣なのである。そういうことが身につけてしまっているという状態をつくること、考える能力をつくることだといってよいであら

う。

しかし現代の教育はこのような態度を生徒児童にもたせるようなよい環境にめぐまれていないようである。それは一言にして言えば、知識主義といわれるものである。むしろ誤まれる知識主義といった方がよいであろう。それを具体的な学習の現場の問題として言うと、授業の中で多くの教師がねらっている所は、上に述べたような思考する態度を育てようとしているのではなく、そんなことはどうでもよいといったら言いすぎだが、考える行動の結果出て来た結論を与えることなのである。これはひとりひとりの教師の意識にしてみれば、不服な人もいるであろうが、そういう人が子どもの思考を育てようと思わないにかかわらず、実際に思考を育てるように教育の筋書きがつくられてはいないということである。

これは日本の教育の歴史的伝統でもあるが、自然科学にしても、社会科学にしても、その結論にこだわること急で、その結論が生まれて来るプロセスを重視しないということである。大きな歴史の流れで言えば日本は後進国として百年前に開国して、欧米の知識という、いわば彼等が思考を積みあげてつくりあげた結果をできるだけ早く輸入して、自然はこうだ、社会はこうだという結論をうのみにすることに努力をした。一種の模倣であろう。この百年の潮流というのは、日本人の物の考え方を大きくつくっている。教育はそういうヨーロッパ文化の輸入の先端に立って役割を果たして来たので、とくにそういう性格が強いのである。百年の間、教育の内容、方法について、日本がやって来たことをみると、自然科学を教育する理科でも、社会のことを考える社会科でも、みな考え方、思考を育てるのではなく、結果をおぼえておくという所に重点がある。

最近問題になっている受験戦争というのも、その考え方が生み出したものである。どれだけのことをおぼえているかを試験するというところに重点があつて、どのように思考して行くかということを経験す

ることにはなっていない。これがますますまちがった方向へ進んで来ている。大事な考えるということのを忘れて、本当に知っていることが何の意味があるのかと思うことでも知っているかどうかということだけで、よけい知っていればよいと考えるようになって邪道にはいつて来たのである。そういう全体的な雰囲気の中では、本当に考えさせる教育をすることはむずかしい。子どもの思考を阻害する原因は非常に深い所にあることをまず知っておかなくてはならぬのである。

(4)

授業の実際を見ていつも問題としてとらえられることは、話し合いの活動をやっても、あるいはまた説明をしているところでも、さらに何か作業をさせている時でも、そこにつきまとっているのは、結論に到達しようという考え方が強く動いていて、それを中心にして授業が進んでいるということである。これは考えることを重視している先生でも、そういうことにあまり関心のない先生でも大してかわりがない。つまり思考ということを重視している先生でも、結局は、結論を出すことに重きをおいているのだということである。

その点をまず打破するのがたいせつなのだということである。こういうことを言えばすぐ反発があることはよく知っているが、それをのりこえることを考えなければ、思考を育てる教育などというものはおこらないのだということなのである。

思考を育てるには、材料をもって来て、それについてどうということを見て行くのかを明らかにすると

いう活動をこつこつやらなくてはならない。そういう習慣をつくらなくてはならぬということ述べたが、そういうことになると、まず材料をたくさん集めなくてはならぬ。そういうことも現代は真剣には考えられていない。お茶をにごしているのである。かりにそれができたとしても、その材料を集めて、真剣にやり出したら結論が出ないであろう。そうすると教師はあわてるのである。ところが実は結論が出ないことがたいせつなのである。思考するとはそういうものである。思考することが活発であればあるほど結論の限界はせばめられて来るのである。「これだけの材料で考える限り、教科書に書いてあるような結論は出ませんね」というような事態に追いこまれるのである。それがたいせつなのだ。そういう教育になったときは子どもは活発に思考している。いな子どもを活発に思考させるために材料をそろえれば、そろえるほど結論の出ない教育になるということである。

これを言いかえれば、現代教育でねらっていることはあまりにも早急な結論で、考えないで結論を出すことになっている。教科書もそうになっているということである。そういう現代教育の性格が、実は子どもの思考を阻害している一番大きい原因なのであって、思考の阻害の原因は外にあるのではない。われわれ教育をしているものの物の考え方自体が、子どもの思考をつぶして、考えないで、物を記憶すればよい、正しいと信じておぼえておけという教育になっているのだ。意識してそうしているのでなく知らずにそうになっている。その根源は、リアリズムの欠如、材料をもって来て考える態度の欠如である。